

〈コレクション展報告〉

令和三年六月十二日～八月十五日

特集展示

美の殿堂の85年 大阪市立美術館の展示室

大阪市立美術館は令和四年秋より改修工事を計画している。当館は登録有形文化財に登録されているため、この工事で外観に大きな変更はないが、開館以来八十五年の長きにわたって使われ続けてきた展示室や展示ケースも改修される大規模な工事になる予定である。



【図1】昭和11年開館当初の第5展示室

そこで展示室内に作品を展示せず、展示室と展示ケースだけをご覧いただくという趣旨で企画したのがこの「特集展示」である。作品を何も展示せずに特集展示とはいかがなものかとも思うが、作品を展示せずにコレクション展を名乗る方が不遜であろうとの判断である。作品はないが、確かに特

集には違いない。

さて、今回の特集で公開した展示室は本館北一階の第五展示室と第一・第二展示室である。会場ではA四判両面刷の「解説シート」を配布した。作品キャプションと作品リストの代わりである。また、作品を展示していないことからこの特集展示の室内では撮影を許可した。

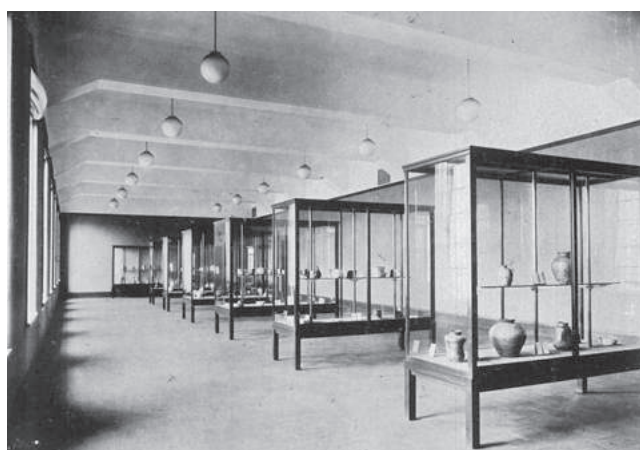
まず、最初の第五展示室は当館で最も広い展示空間である。今回は開館当初から使用している展示ケースを、作品を収めず空のまま安置した。開館当初は社寺より寄託された仏像等彫刻作品が林立していたため、「彫刻室」の通称がある。【図1】は開館当初の第五展示室である。正面奥壁に



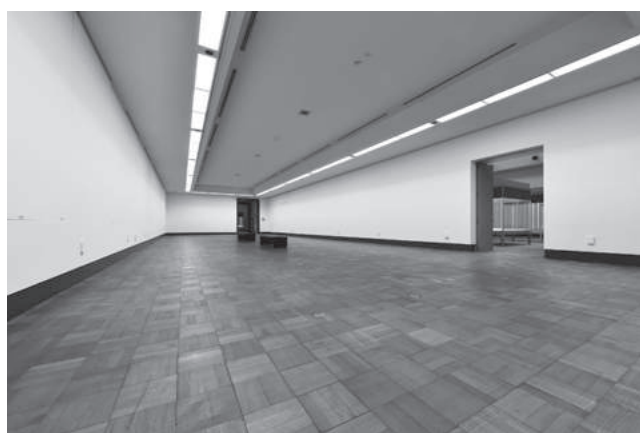
【図2】現在の第5展示室

立つ奈良・薬師寺所蔵の重要文化財《木造光背残欠》をはじめ、現在には所蔵寺院へ返還された仏像が立ちならぶさまは圧巻である。天井のガラスを通して外光が室全体に柔らかく差し込み、展示ケースの天井もガラス張りで、自然光によって鑑賞していたことがわかる。

【図2】が現在の第五室である。広い空間



【図3】開館当初の第1展示室



【図4】現在の第1展示室

はそのままだが、やや暗く見えるのは人工光源の照明にのみよるためである。側壁張り出し部に見られるのは空調の吹き出し口である。次に、第一室へご案内しよう。開館当初は壁面に窓が開けられ、やはり自然光が射し込む明るい空間であった【図3】。ここに写る展示ケースは【図2】で示した現在も現役の展示ケースである。ただ、当初は天井もガラス張りですっきりとしたデザインであったことがわかる。現在は上部の照明ユニットや塗りなおした外装のおかげでかつて重々しく野暮ったく見える。八十五年前の姿の方がよほど作品鑑賞を邪魔しない優れたケースであったといえるかもしれない。現在では保安上、また作品の保存上の観点から窓をふさぎ外光を閉ざしているほか、天井を貼ったため梁の形状が見えなくなっている【図4】。



【図5】現在の第1展示室から第2室を望む

開館当初は各展示室に扉が設けられていた。現在では扉としての機能を失っているが、扉の枠は開館当初そのままに残されている【図5】。几帳面取りを施し、周縁にモールをあしらった優雅なデザインである。注目したいのはその上部に掲げられた表札である。かなり墨色が薄れているが、よく見ると各展示室名が表示されている。ここでは右から左へ横書きで「第一陳列室」と書かれていることがわかる。こうした表記法を見て、この建物が戦前の建物であることにあらためて気づかされる。

今回の特集展示で紹介する最後の部屋は第二展示室である。開館当初は他の展示室と同様、大きく窓が開き外光が注ぎこんでいた【図6】。中央に鎮座するのは通称Fケースと呼ばれる大型の展示ケースである。このほぼ正方形の平面を持

ミュージアムフェスティバル大阪（イケフェス大阪）」に参加し、休館日に登録有形文化財である美術館の建物を公開してきた。その経験上、熱心な建築ファンが数多く存在することは十分に承知していたつもりである。そして、コロナ禍でもあり、かつ展覧会日程の都合で昨年度（二〇二〇）と今年度はイケフェスに参加できなかったことも今回の特集展示を企画した理由のひとつであった。つまり、一定数の建築ファンに対しても開かれた美術館としての役割を果たしたいという思いである。裏返せば、ある程度は楽しみにしてくれる方もあるだろうと予想していた。東京・世田谷美術館での展示室の公開企画や渋谷区立松濤美術館での「白井晟一入門」展など美術館の建物・展示室に注目した魅力的で話題を呼ぶ企画が業界では相次いでいることも当然念頭にあった。

しかし、そうした予想をはるかに超える反響をこの特集展示は生んだ。新聞・テレビ・ウェブマガジンからの取材があり、それらを目にした方々から声をかけられることも多かった。また、撮影可能だったこともあってか各種SNSへの投稿も目立った。目にしたものはどれも好意的で、現代アートのインスタレーションとして見る向きがあるのはまだ予想できたことだが、そればかりか、この展示から大阪市政への批判を読み取るなどずいぶんと深読みをされる観覧者もあることを知らされた。展示はメディアであり、メディアはメッセージとなることを再認識させられる結果となった。権力者に媚びるつもりもないが、企画意図は冒頭に述べた通りで、無論、当方に他意はない。展示は独り歩きをする。気をつけねばなるまい。こうした反響は望外のもので大変にありがたいのだが、しかしどこか納得がいかないのもまた事実である。というのも普段のコレク

ション展ではテーマ設定から作品の選定、展示レイアウトの設計から実際の展示作業、作品キャプション・解説の執筆など何をどう見ただくか事細かに考え抜き、実際に微調整を加えることで展示を完成する。他の所蔵者から作品を借用する特別展ではなおさらのことである。しかるに、今回の企画は改修工事を前に古い状態の展示室と展示ケースを最後に見ていただくように企画したものであることは冒頭でも述べた通りである。多少の仕掛けと工夫を凝らしたつもりではいるが、とはいえ普段の展示にかける時間と労力とは比べ物にならないほどの「省エネ」企画である。その結果がこれほどの反響を生んだことについては、自らの学芸員としての存在意義を根本から問い直す必要すら迫られたようにも思う。たしかに、オーソドックスな展覧会よりもキワモノとでも呼びたくなるような変化的企画の方が好まれる傾向は、昨今の展覧会事情として認められるべきかもしれない。価値観の多様化が極致に達した感のある現代社会においては、単に美術作品の鑑賞の場ではない美術館は淘汰されるのかもしれない。しかし、それでも美術館では作品を見てほしい、展覧会を楽しんで欲しいと思うのは幼稚な発想なのだろうか。

まだ整理がついていないのは、結局のところ我々学芸員（もしくは私）が見ていただきたいと考えている作品や展示・企画と、世間が求めているものとの乖離をまぎまぎと見せつけられてしまったかなのだらう。今後このギャップをどう埋めていくか、我々が良いと思っているモノや展示をどう伝えていくか。今回の特集展示は根本的で大きな問題を再認識する機会となった。いささかショッキングな経験であったことを付言し、記録にとどめておきたい。

（児島大輔）

令和三年九月四日～十月二十四日

特集展示

井口古今堂と近代大阪

―船場の表具師と芸術ネットワーク―

井口古今堂は天保元年（一八三〇）に曾根崎で創業し、のち大阪の中心地である船場を拠点に活躍した表具の老舗である。慶応年間から伏見町に移転、その後、高麗橋、平野町と移り、平成十七年（二〇〇五）に廃業するまで、五代にわたっている。

二代目は鴻池家の仕事を請け負うとともに、古美術も手掛けた。また俳句をよくして二畳庵桃室三千雄と号した。

三代目は大阪経済が活況を呈していた時代にあつて、住友家、藤田家の建具や表具を任された。住友家から寄贈された大阪市立美術館の敷地にかつてあつた同家茶臼山本邸もその一つである。また上野理一、村山龍平、小川為次郎、芝川又右衛門、嘉納治兵衛、阿部房次郎、小林一三、山口吉郎兵衛、辰馬悦蔵、野村徳七といった数錚々たるコレクターたちを顧客としていた。

当時活躍した大阪画壇の画家たちも、井口家と深いつながりがあつた。細谷立斎、村田香谷、西山完瑛、姫島竹外、武部白鳳、上島鳳山らの手紙が卷子装に仕立てられて残っており、彼らと表具師のやりとりが窺える。井口古今堂は表具師であると同時に、画家と顧客を仲介する役割をも演じていたのである。

さらに三代目は邨僊と号して自らも絵画、とりわけ指先を使って画く「指頭画」を得意とした。住友家の当主であつた春翠は井口家

の最も重要な施主であつたばかりでなく、邨僊に画の手ほどきをうけ、時に合作をするなど、顧客と表具師という枠を超えた交流があつた。豊中に土地を購入して「三笑庵」と称する別荘を築き、ある時はコレクターたちと筍狩りなどの宴席を設け、ある時は画家を集めて席画をするなど、そこは大阪の芸術家たちのいわばサロンとなっていたのである。

井口家に残された資料には、書画の作品（表具の見本でもある）のほか、陶磁などの工芸品、表具に用いる道具類、表具裂や紙などの材料、手紙や記録といった文書など多岐にわたっている。二〇一八年春から共同調査を開始し、コロナ禍で中断を余儀なくされたものの、書画と陶磁の主要部分を終えることができた。

本展ではその成果の一部を示し、井口古今堂の大いなる業績を回顧することにした。また一般社団法人美術フォーラム21様より協賛をいただき、小冊子を刊行することができた。以下に目次を示す。

『特集展示 井口古今堂と近代大阪

―船場の表具師と芸術ネットワーク―

井口古今堂五代

徳山亜希子（新見美術館）

井口古今堂の表具

重村洋（表具師）／徳山亜希子

文化人が集う表具商

中谷伸夫（一般社団法人美術フォーラム21）

井口古今堂とコレクター

弓野隆之（大阪市立美術館）

井口邨僊と住友春翠

実方葉子（泉屋博古館）

井口古今堂と阿部房次郎

森橋なつみ（京都国立博物館）

書画鑑定取次としての井口古今堂

明尾圭造（大阪商業大学）

大阪画壇コレクション

林野雅人（大阪中之島美術館）

表具師という仕事

小川知子（大阪中之島美術館）

井口古今堂と上島鳳山

柴田就平（笠岡市立竹喬美術館）

井口家所蔵の工芸品―陶磁器を中心に

杉谷香代子（大阪市立美術館）

最後に、調査にあたり快く資料を開示してくださり、貴重なお話をうかがわせて頂いた五代目夫人の井口敏子様、作業のあらゆる場面においてお手伝い頂いた重村洋様、共同調査や原稿執筆をして頂いた各位に、心よりお礼を申し上げます。

（弓野隆之）



1



2



3



4



5

- 1 長尾雨山「行書古今堂扁額」昭和十四年（一九三九）
- 2 井口邨僊「慶沢園図」大正十一年（一九二二）
- 3 庭山耕園「三笑庵図」大正一昭和期
- 4 「山津波赤茶碗 銘霖雨」上田耕甫作、琴浦窯桐山施釉、昭和十三年（一九三八） 阪神大水害時、住友家の蔵に流入した土石流の土で制作
- 5 井口邨僊による表具 伝易元吉「白鷺図」本館蔵（阿部コレクション）

令和三年四月三日～五月十六日（四月二十四日）

（緊急事態宣言発令に伴い、四月二十五日より臨時休館のまま閉幕）

桃山へ、桃山から 中近世工芸の諸相

特別展「豊臣の美術」に関連して、当館の館蔵寄託品から桃山時代の工芸を紹介すべくコレクション展「桃山へ、桃山から 中近世工芸の諸相」を企画した。特別展「豊臣の美術」が出品作品を豊臣氏ゆかりの美術に限るというストイックな企画であったため、その時代背景について工芸分野で後方支援することを目的とした。日本の工芸史上において桃山時代が一つの画期であるとの認識にたち、中世室町時代から桃山時代へ、そして桃山時代から近世江戸時代へ



会場風景

という、ひとつの帰結点であり、なおかつひとつの出发点でもある桃山時代の工芸を提示したいという思いをタイトルに込めた。

会場の本館北二階・第六展示室は両側面に腰高の壁面ケースを備え、大型の書画作品の観覧には都合の良い展示室であるが、工芸とりわけ小品の展示には本来やや不向きである。そこで、独立ケースを展示室の中心

線上に設置し動線を変えてジグザクに順路を設けるなど、観覧者に間延びした印象を与えないよう工夫した【挿図】。

陶磁・漆工・金工の三分野の工芸品からなる出品作品は全五十八件にのぼり、以下に示す八つの小テーマに沿って展示した。

まず、「茶の湯の工芸」では館蔵寄託品の鉄釜や茶入、水指、茶碗など、桃山時代を中心に室町時代から江戸時代にかけての茶道具を紹介した。次に「掌中の桃山」と題し、香合など愛らしい小品を賞玩するコーナーとした。「桃山から江戸へ」は文字通り過渡期の様相を知るべく、蒔絵硯箱をはじめとする漆工品を紹介した。同様に「南蛮趣味！」も過渡期の作品で構成し、寄託作品からいわゆる南蛮漆器を選りすぐった。上記の流れを受けて絢爛豪華な江戸時代の漆工品が誕生したことを、当館を代表するカザールコレクションの婚礼調度によって紹介したのが「天下泰平お江戸の雅！ 婚礼調度」である。さらに、「神仏への祈り」では個人蔵の根来塗や、滋賀・成善提院所蔵《蓮華文香炉箱》をはじめ柄香炉など社寺で用いられた仏具等を紹介した。なかでも愛知・大薬師不動院所蔵の《銅水瓶》は慶長十一年（一六〇六）銘を持ち、豊臣秀頼を檀越とし片桐且元を奉行として奉納された作品で、「豊臣の美術」展にも密接にかかわる重要作例である。最後の「オラ、天下一になる！」では「天下一」銘を持つ蓬萊鏡を紹介した。天下一の称号は織豊期に始まったもので、桃山時代あるいは「豊臣の美術」を彩った作品といえよう。

以上のように、特別展に寄り添うように企画したコレクション展であったが、普段なかなか展示する機会のない作品を出品することもできた。実はコレクション展こそ宝の山なのである。（児島大輔）

令和三年四月三日～五月十六日（四月二十四日）

（緊急事態宣言発令に伴い、四月二十五日より臨時休館のまま閉幕）

「戦国武将像」

特別展「豊臣の美術」の開催にあわせ、桃山人の生涯を彩った「夢」に思いをはせていただければ、との趣旨から、豊臣一族、豊臣家臣とゆかりの婦人らのほか、織田氏、徳川氏周辺の武将らの肖像画を特集した。本来、像主を供養する仏事に用いるための画像であるが、ご所蔵社寺のご理解、ご協力により長年にわたり寄託を受け、展示に活用させていただいてきた。会期中からの臨時休館により十九日間の開催となったが、当館所蔵「豊臣秀吉像」（別掲出品リスト・No.9）については、幸い同時開催の特別展「豊臣の美術」の会場で臨時休館に入るまでの間に公開することができた。本像は令和元年度に解体修理を実施したところで、本紙絹本が通常の画絹とは大きく異なり、撚りの強い縮緬のような材を使ったごく粗い組成であることが判明した。画絹の代わりに秀吉の遺品を利用した可能性も考えられることを付記しておきたい。

（知念理）



《豊臣秀吉像》
惟杏永哲 賛・慶長5年（1600）
本館蔵 古賀勝夫氏寄贈

出品目録

No.	指定	名称	賛者等	員数	時代	所蔵
1		徳川家康像	天海賛	1 幅	江戸時代・17世紀	奈良・喜蔵院
2		奥平信昌夫人像	梁南禅棟賛 久五郎重徳筆	1 幅	寛永2年（1625）賛	京都・大法院
3		二条昭実夫人像	南化玄興賛	1 幅	慶長8年（1603）賛	京都・雑華院
4		稲葉忠次郎夫人像 （涼岩受招信女像）	鰲山景存賛	1 幅	慶長15年（1610）賛	京都・雑華院
5		前田玄以夫人像	一宙東黙賛	1 幅	慶長15年（1610）賛	京都・蟠桃院
6		稲葉忠次郎像	一宙東黙賛	1 幅	慶長6年（1601）賛	京都・雑華院
7		石川光元像	南化玄興賛	1 幅	慶長6年（1601）賛	京都・大雄院
8		前田玄以像	南化玄興賛	1 幅	慶長7年（1602）賛	京都・蟠桃院
9		豊臣秀吉像	惟杏永哲賛	1 幅	慶長5年（1600）賛	当館（古賀勝夫氏寄贈）
10		豊臣棄丸像		1 幅	桃山時代・16世紀	京都・妙心寺
11		豊臣秀長像		1 幅	江戸時代・17世紀	京都・禅林寺
12	重文	山中長俊像	三江紹益賛	1 幅	桃山時代・17世紀	京都・慈芳院
13		山名豊国像	鉄山宗鈍賛	1 幅	慶長10年（1605）賛	京都・東林院
14		牧村政倫像	柏堂景森賛	1 幅	元亀3年（1572）賛	京都・雑華院
15		華嚴院日昇先公 大禅定門像	東庵宗暎賛	1 幅	天正12年（1584）賛	京都・霊雲院

令和三年四月三日～五月十六日（四月二十四日）

（緊急事態宣言発令に伴い、四月二十五日より臨時休館のまま閉幕）

春夏養陽―中国の書画

「夫れ四時陰陽は、万物の根本なり。所以に聖人春夏は陽を養ひ、秋冬は陰を養ふ。」（『黄帝内経・素問・四氣調神大論』）

中国の古代思想において、世界は「陰」と「陽」バランスによって成り立っていると考えられてきた。四季の巡行もまた陰陽のはたらきとされ、春になると陽の気が起きはじめて草木が芽吹き、夏になると陽気が最大になって成長を促すという。本展では力強く生命感にあふれる春夏を主題として中国書画を紹介した。

展示したのは、十五世紀から十九世紀にいたる明清両朝の絵画三十二件、書蹟三件、計三十五件である。その中から、張賜寧「桑蚕詩意图」（本館蔵）について紹介する。

張賜寧（一七四三―一八一八）、字は坤一、号は桂巖・十三峰老人・富春山樵・北海外史、居所を黃花吟館といった。直隸滄州（河北省）の人で、初め北京に遊んで紀昀に重んぜられ、孫星衍・牛繩祖・朱珪らと交わり、やはり北京に来ていた「揚州八怪」の一人羅聘と名を齊しくした。幼いころから画をよくし、「小四王」の一人である王宸は、一目見てその筆の妙を歎え、奥義を授けた。そこで宋元を法とし、上は董源・巨然に溯って「四王」の精髓を得たという。だが成年後はこれに飽き足らず、江南に移り、南通（江蘇省）管河州判に官した。以後は揚州に住んで職業画家として活躍する。その作品は山水を主としたが、伝統に捕われない清新なものとなった。

また揚州の市場の需（もとめ）に応じて花卉・墨竹・人物など、広く題材をとって多彩な作品を残した。李斗『揚州画舫録』は「人物山水を作りては多く旧法に依らず、唯だ氣韻を以て人に過ぐ。着色の花卉は、独り絶技を称せらる」と記す。「揚州八怪」を継承し、後世の「海上派」へと連なる位置にある画家として注目に値する。

本作は、季節は寒さの残る春、かごの中には桑の葉を食べて育った蚕が、元気にうごめく様子を愛らしく画く。共箱に前田暢堂（一八一七―一八七八）の臨摹作が収められている。細部、筆勢に至るまで見事に書き写され、画家の力量が窺える。また幕末明治初期における張賜寧の画の受容を知る資料としても貴重である。

緑剪柔桑帶女枝、曉窗風送雨絲絲、吳娘不避春寒重、正是新蠶上箔時。 富春山樵者寧志於黃花吟館。「張賜寧」（朱文方印）（左脚）「富春山樵」（朱文方印）

（森橋なつみ／弓野隆之）



張賜寧「桑蚕詩意图」



前田暢堂「臨張賜寧桑蚕詩意图」

令和三年四月三日～五月十六日（四月二十四日）

（緊急事態宣言発令に伴い、四月二十五日より臨時休館のまま閉幕）

受贈記念 アンコール・ワットの拓本

〈アンコール・ワット拓本保存会寄贈〉

令和二年（二〇二〇）度、アンコール・ワット拓本保存会（特定非営利活動法人）より九十九点の拓本が当館へ寄贈された。本展はこの度寄贈されたアンコール・ワットの浮彫の拓本九十九点のうち、三十八点を展示するものであり、南一階第十二室、第十三室の壁面をぐるりと覆う構成とした。念のため述べておくと、拓本とは石や木などに刻まれた文字や文様に紙を当て、墨をたたいて写し取ったもののことである。

アンコール・ワットは、カンボジアに興ったアンコール朝の首都にあるヒンドゥー教寺院である。一一一三年頃より、約三十年かけて、アンコール朝最盛期の王・スールヤバルマン二世により建立された。四周を約五・四キロメートルの環濠に囲まれた大規模な敷地の中に、砂岩による三重の回廊と、中央祠堂を含む五基の祠堂が建つ。左右対称の均整美を見せる建築構造、回廊の壁面を飾る勇壮かつ優美な浮彫装飾が、世界中の人々を引きつけてきた。

特に創建当初から十六世紀にわたり刻まれたと考えられる、高さ三メートル、総長約五百メートルにもなる第一回廊の、スールヤバルマン二世を讃える長大な行列やヒンドゥー教の神話である「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」の浮彫が最も有名だろう。寄贈された大部分が、この第一回廊の拓本であった。

回廊の浮彫を擦り取った拓本は、浮彫の緻密な表現や石の質感、スケール感を伝えている。今回の展示では、壁面を埋め尽くした拓本から、アンコール・ワットの空間を感じてもらえるよう期待を込めて並べたつもりである。

寄贈の拓本はいずれも、保存会所属の方々が過去四度にわたり現地に赴き、カンボジア政府の許しを得て、体を目一杯動かし汗水を垂らして採集されたもので、採拓者の個性がうかがえるものも多い。平成四年（一九九二）、ユネスコの世界遺産に登録されてからは、アンコール・ワットでの採拓は禁じられている。そうした点からも、これらは今やもう作り出せない大変貴重な拓本と言えるだろう。

（石川温子）



展示風景

令和三年四月三日～五月十六日（四月二十四日）

（緊急事態宣言発令に伴い、四月二十五日より臨時休館のまま閉幕）

彫刻時光 北魏の石造仏教・道教彫刻

彫刻時光とは、「時を刻む」といった意味の中国語である。

本展では山口謙四郎氏が蒐集した大阪市立美術館所蔵山口コレクション中国石造彫刻を中心に、北魏そして続く東魏・西魏の仏像、道教像と関連作品を展示した。

中国南北朝時代の北魏（三八六―五三四）は、北方の遊牧系民族が樹立した強大な帝国であった。北魏では国家事業としての寺院の建立と巨大な石窟の造営が行われ、仏教が広く中国全土に浸透するなかで地域ごとに特色のある仏像が生み出されるようになった。長い中国仏教史において、最も優れた石造仏教彫刻が生み出されたのは、おそらく唐とこの北魏である。

一方、道教は老子を祖とする中国固有の宗教で、もともと道教では礼拝の対象とする偶像が無かったが、各地に広まりつつある外来の宗教＝仏教の影響を受け、北魏より造られるようになった。

山口謙四郎氏は中国石造彫刻のなかでも特に北魏そして東魏・西魏の造形に関心が高かったらしく、山口コレクションはこの時期の帝都における優品から地方性豊かで素朴な像までを網羅している。そのため、北魏の仏像、道教像における時代的変遷と地域的諸相を一望する展示が可能となった。

なお、その一点である天龍山石窟（山西省太原市）将来の浮彫維摩坐像には、中国の伝統的な威儀具・凭几が表されている。この

たび新たに、現存稀な日本で制作された木製漆塗の凭几（奈良・薬師寺所蔵）をご寄託いただき、あわせて展示することで中国から日本へという広がり結びつきを示すことが叶った。（齋藤龍一）



展示風景

令和三年六月十二日～八月十五日

大阪の洋画

山内愚僊に始まる大阪の洋画は、松原三五郎、赤松麟作が画壇の基礎を形成した後、小出檣重らがモダニズムの新風を吹き込んで画壇に活気をもたらし、それぞれの個性を競い合った。大阪の近代を彩った洋画家たちの軌跡を振り返り、戦後から現代へと続く流れをたどれるよう、本展は近年の新収蔵作品を含む二十五点（展示替含む）により構成した。その多くは作家本人、またその遺族、関係者らからの寄贈により当館に収蔵された作品である。大阪中之島美術館がいよいよ開館（令和四年二月二日）したが、八十五年の歴史とともに成長してきた当館の洋画コレクションの今後にも、改めてご注目いただきたい。本展出品作品として、令和二年度の寄贈による新収蔵作品から三点を図版紹介する。

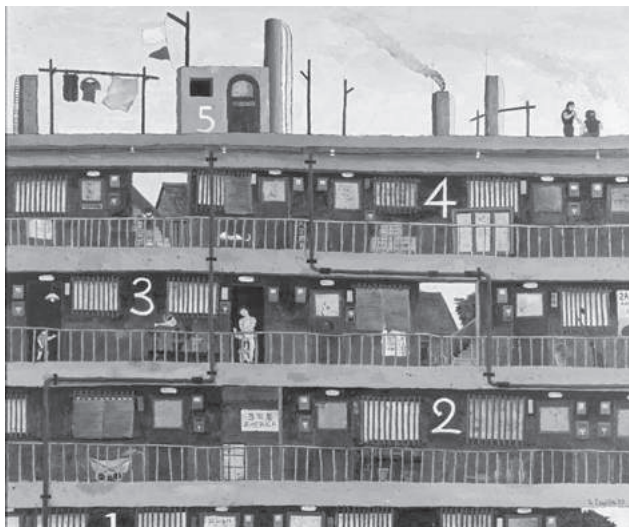
（知念理）



広瀬勝平（1877-1920）《草上（草を摘む少女）》
明治時代後期 本館蔵・星野桂三氏寄贈



北村種三（1902-51）《秋果》
大正末期～昭和初期 本館蔵・鈴木鐵男氏寄贈



藤田龍児（1928-2002）《軍艦アパート》
平成2年（1990） 本館蔵・星野桂三氏寄贈

令和三年六月十二日～八月十五日

秀麗精緻 明清時代の工芸

特別展「揚州八怪」にあわせて、当館の館蔵寄託品から中国・明清時代の工芸を紹介すべく「秀麗精緻 明清時代の工芸」を企画した。揚州八怪と同時代の工芸作品を概観することで明清時代の文化と文人たちの活動への理解を深めることを目的とした。

会場は本館南一階の第十三室と第十四室の二室から成り、全四十九件にのぼる出品作品を以下に示す通り六テーマに沿って展示した。まず、第十三室では小室であることを活かして文人たちの書斎をイメージした展示を試みた。最初のテーマ「文人の愉しみ 茶と琴」とでは、寄託品の中国由来の煎茶具を清時代の文人たちも同様に楽しんでいたであろうと想定し、館蔵の七弦琴とともに展示した。



会場展示風景
飾り棚による書斎模擬再現展示

次に「香煙揺らぐ書斎 文房清玩」をテーマとして書斎の模倣的な再現を試みた。四方を囲むように独立展示ケースを配置して親密な空間をつくり、飾り棚を活用して文房具を展示したほか【挿図】、揚州八怪も書の手本とした古代青銅器の銘文が観察できるよう展示するなど、文人たちが清玩した世界観をイメージできるような空間の構成を目指した。あわせて、「憧れの文人生活指南」と題して文人とは何か、蘭亭修禊に代表される雅集とは何かを解説したパネルを掲示した。いずれも「揚州八怪」展を理解する上でも欠かせない知識であるため、ここではあえてやや偏りのある説明によって一般の観覧者の興味を引こうと考えた。この試みがどこまで成功したか定かではないが、好意的な感想が多く届いたことは幸いであった。

次室では「威風堂々 明時代の工芸」と題して彫漆、螺鈿、青花、五彩と見ごたえのある作品で、明時代の正統な工芸のありようを紹介した。次に「カラフル・チャイナ 清時代のいろどり」をテーマに掲げ、当館を代表する清朝工芸品のひとつである雍正期の豆彩をはじめとする陶磁器や七宝などで、当時の科学的な研究と開発によってもたらされた彩りを鑑賞する空間とした。次のテーマ「温故知新 古典の素養と倣古」では赤壁や蘭亭の故事をモチーフとした作品のほか、同一ケース内に漢代の青銅器とこれにならった明代の陶磁器を展示するなど、当代の古典憧憬と倣古の風とを紹介した。最後に「星に願いを 信仰世界と造形」と題して道教神像や銅鐘、銅鏡や密教法具など道教・仏教関連作品によって、文人たちの生活にも密接に結びついていただであろう信仰世界を垣間見ることとした。以上、この企画が中国工芸の理解だけでなく「揚州八怪」展の理解に少しでも役立ったとすれば幸いである。

(児島大輔)

令和三年七月十三日～八月十五日

小出三郎

小出三郎（一九〇八―六七）は大阪市東区出身の洋画家である。旧制天王寺中学校を卒業後、大阪美術学校をへて信濃橋洋画研究所へ移り、昭和七年（一九三二）第二回独立展に初入選した。同十六年結婚して豊中市に住み、空襲が激化した同二十年には長野県に疎開した。戦後は同二十二年に独立美術協会会員となり、晩年まで独立展で活躍した。その作品世界は没後半世紀以上をへて、なお新鮮な魅力を放ち続けている。本展では、自己を凝視する画家の深い哀

愁を訴えかける風景、

裸婦、静物など油彩画

十一点のほか、素描類

など関係資料も合わせて

紹介した。本展出品

作品として、令和二年

度の寄贈による新収蔵

作品から三点を図版紹

介する。（知念理）



《船とたらし》 昭和15年（1940）
第10回独立展 本館蔵 小出君子氏寄贈



《裸 (A)》 昭和35年（1960）
第28回独立展 本館蔵 小出君子氏寄贈



《木の根》 昭和33年（1958）
10周年記念関西独立展 本館蔵 小出君子氏寄贈

令和三年九月四日―十月二十四日

社寺縁起 ― 聖なるファンタジー

社寺草創の由来、祀られた神仏の霊験をはじめ、神仏と人との間に起こった摩訶不思議な出来事を語る社寺縁起・・・それは聖なるファンタジーの世界である。神仏への信仰、想像力あふれる精神世界をビジュアルに表現した絵巻作品を中心に、近世・近代の関連作品を交えた二十六点（展示替含む）によりその魅力に迫った。

なお、本展出品《犬寺縁起絵巻》（上・下巻 田万コレクション）の先行研究である、徳田和夫「『犬寺縁起絵巻』の成立―付・翻刻―」（『学習院女子大学紀要』創刊号、平成十一年）では、本来七図ある上巻の絵を六図と紹介している。五段目と六段目の絵の図様が非常に酷似しており、調査データの整理時に誤認が生じ、五段目の絵の存在が見落とされたと推測される。その結果、上記文献では六段目の絵に〈絵5〉、七段目の絵に〈絵6〉のキャプションが付されている。〈絵5〉は本来の〈絵6〉、〈絵6〉は本来の〈絵7〉にあたる。見落とされた〈絵5〉、および酷似している〈絵6〉をこの機会に図版掲載していただきたい。

（知念理）



会場風景



《犬寺縁起絵巻》本館蔵 田万コレクション 〈絵6〉



《犬寺縁起絵巻》本館蔵 田万コレクション 〈絵5〉